

# 岐路に立つ

フラワー長井線

山新 <<1

「文面より経営状況は長。書面の一文字一文はるかに厳しい。瀬戸線字を吟味しながら、委員にあることを強調して」ある必要がある。」「会社側の自助努力、頑張っている状況も盛り込むべきだ」。今日五日の長井市議会地域交通対策特別委員会（小関勝助委員

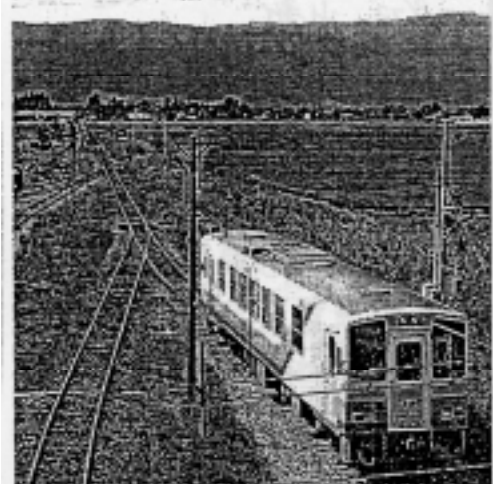
高校生の通学など地域住民の欠かせない足として大きな使命を担ってきたフラワー長井線は、存亡の危機に直面している。旧国鉄から切り離された出白ゆえの慢性的な赤字に加え、少子化による需要の先細り傾向。赤字補てんのための基金は元金自体が取り崩され、底を突く寸前だ。運営する第三セクター・山形鉄道（長井市、若狭野政社長）の経営改善の努力もむなしく、累積赤字は膨らむ。存続の境界線上をさまよいつつ、揺らぐ鉄路。地域住民の「生活基盤」にもなっているローカル線を失っていいの。同線の課題を探り、行方を展望する。（長井支社・青塚 晃）

## 地域、盛り上がらない

### 底つく基金 増収策見当たらず



援を求めざる意気（案）。高だ。同社の赤字補てんまた、文案を詰める段階を目的に、県と長井、南だが、今後、議決を経て、陽、川西、白鷹の沿線二各方面に働きかける構え。市二町が造成した基金だ。フラワー長井線の間、農実（利子）で赤字の穴



夏雲を背に走るフラワー長井線の列車  
—今泉駅付近

題に関する調査検討に特埋めをするはずが、低金化して設置された同特別利の影響に加えて、車両委、関係機関、地域住民や線路、踏切などの設備への呼び掛けの先駆けにならうと動きました。そのアクションの第一弾だが、それにしても、存続に造られた六億円は大きく減った。〇三年度末がないと」と委員の表情に陰りがにじんだ。一億五千八百万円。山形鉄道運営助成基金の二〇〇三年度末現在の残高は、さらに下回る。基金を取り崩し始めた

のは一九九九年から山形鉄道の経営損益はコストを削減した」と若で、二〇〇二年は一億円前後が赤字補てんに充てられてきた。本年度も同程度を想定すると、実質残度の修繕費などによって高からすれば、年度末にはほぼ底を突くことが予想される。経営状態の根本的な改善が望めない中、新たな支援措置がないければ、こうした状況は要請を受け、本格的な経営改革に向けて同社が策定した経営健全計画に沿った取り組みが奏功したとみられる。

「運行の効率的化を図り、適正労務の配置で人件費を減らすなど大幅に」地域の力を結集できるか、そしてその力で活路を開けるか問われている。

### フラワー長井線年表

1912年	長井軽便鉄道普工
1913年10月	赤湯～梨郷間開通
1914年11月	梨郷～長井間開通
1922年9月	長井線と改称
12月	長井～鮎貝間開通
1923年4月	全線開通
1980年12月	国鉄経営再建特別措置法成立
1986年10月	第3次特別地方交通線選定承認
12月	第1回長井線特定地方交通線対策協議会開催
1987年4月	第2回同協議会開催（第3セクターで鉄道として存続合意）
1988年3月	第3回同協議会開催
4月	山形鉄道設立発起人会議開催
5月	同社創立総会開催
10月	第1種鉄道事業免許取得
1999年12月	運輸大臣代替輸送事業者認定
	山形鉄道営業開始
	運賃改定（平均10%値上げ）